

京都女子大学図書館蔵『かな萬葉集』影印

凡 例

- 一、本複製は、京都女子大学図書館蔵『かな萬葉集』の写真版複製である。
- 一、丁数および表・裏の別を小口下側の部分に示した。
- 一、本文の各歌の頭部に松下大三郎・渡辺文雄編『国歌大観』の『萬葉集』歌番号をつけた。

かき
萬葉集

三四二

KN911
12
Ma48
1



貴重書
443号



萬葉集卷第^{京都}大學
 泊瀬朝倉宮御宇天皇代^{太泊瀬朝倉武天皇}
 三條^{天皇御製歌}

龍もも孰も此くもも少
 少も此 此出も草様も
 家も、 為つても塵見は
 山路の國ハ 押多て吾そ居を
 苦多て 吾そもろく我そ
 背も苦め 家ももろも
 高市興本宮御宇天皇代^{見長定日廣額天皇}
 天皇金吾具山國之時御製歌

山常庭 村山あり水
 取もろ海 天乃香具山
 のけり立 國見を
 國原ハ 煙立
 海原ハ かなめり
 吟柯國を蜻嶋やまの國ハ
 天皇遊獵内宮之時中皇今使御人建
 老猷乎
 八隅知之 我大玉乃
 鰐庚 取撫み
 夕人 伊縁又千り

御執乃 梓乃
予の彈の 音より 翫
今更とく 着様子 今更とく
御執の梓乃 予の彈の 翫
玉期春内代大野子馬敷の翫
いん其草深野
幸讚國女登那之時軍王具作歌
霞之長春此 腕より 肝より
村肝乃 心以痛乃
奴要子馬 少歌
珠乃き 懸乃く

連乃神 吾大王乃
幼幸の 山越の風乃
獨座 吾衣より
初乃 還いあま
大夫此 昔人海より
草枕 客よりあま
半い海 白土
銅の浦に 海處女
やく喧のちいそやう 情
山越の風は時より 不
家め好とて 吾い

右揆日本紀無幸於讚岐國亦
 年主未詳也但山上憶良大夫親撰
 歌林曰訖曰天皇十一年己亥冬十二
 月己卯壬午幸于伊豫湯宮
 一書曰是時宮前有二樹木此之二
 樹斑鳩比未二鳥大集時報多
 挂福穗而養之乃作歌云
 疑從此便幸歟
 中大兄 迎江宮御
宇天皇 三山歌一首
 高山 如所 雲根火 如所
 耳梨 如所 とねあらしひき

神代 如所 山 如所 あり
 山 如所 あり
 虚輝 如所 娘 如所 あり
 くら思ひき
 反奇

高山 如所 耳梨山 如所 あり
 立て見ふ 如所 あり
 渡津海乃豊旗雲 如所 あり
 今夜の月夜清明 如所 あり

迎江大津宮御宇天皇代

天皇詔内廷藤原朝競博

春山百花之艶秋山千葉之

彩時額田王山歌判之歌

冬木成春去来未止

あさり 鳥と来り明れ

山は夜に入るとも

草深きさうきと

秋山乃 東に雲は見え

黄葉と 照てそふのふ

青きさ 雲てそふのふ

うーうー 秋山を告い

額田王下近江國時作歌并戸

王即和哥

味酒の 三輪乃山

青丹若 万の山乃

山は いろあま

道の限 いれふまそま

委曲も 見つゆんと

あふし 見放む心ま

情き雲の隠障へ

又ふ

三輪山と然もかろく雲は

あまぐくくくーや

明日香清御原天皇代 天武天皇 御歌

三吉野の 東我山嶺

時無り 雲ありけり

雨ありけり

其雲れ 時つきく

其雨の ひるはく

限もあらずと云其山道と

過近江菰野時 人麿作

玉も次 畝火の山乃

檀 檀原の いまの世より

あしき、 神のあしき

榊木の 不継嗣

天下 去りて

天満 摩訶不思議

あまの 平山と云

河原 御金

あまの 夷と云

石走 海海の國乃

粟浪乃 大津の玉

天下 去りて

6
ウ

舟競へ 又河より
け川の 多ゆき事あり
此山麓 高き
珠水の 激流に
あふれり
又多見たり
あふれり
神々 神々
并賀川 多き河内
高船と 高知
のり立 国見
かきり 青垣山
山坪の 川調
春部 花
秋 中川の 神と大食
いふ海と 上瀬橋川
下瀬 小瀬
山川 山
神の御代鴨
又奇

山川をりてはるる神長柄

あまの河内へ来るも

右日本紀三年正月天武天皇吉野宮
自又辛巳年二月辛酉月辛
丑年正月辛酉月辛未詳知何月
後作歌

輕皇子宿于安野野時 今唐

八咫知く吾大王は高祖天皇子

神長柄 神といふ神也

あまの 宗子置て

陽口乃 仰瀬の山

あまの 麓山道氏

石の根に 紫樹柁麻

坂馬乃 初起座て

あまの 夕なりし

ミ市乃 阿騎の大野子

旗々々 四能と一を

草花 多しなりき

しるし

短歌

阿騎のに今も旅人渡りき

いと福なりやとふなりき

真草判り野々々と葉過今半

君の形見の初よりあり

東野北矣とて所見て
夕見とて月西渡
日變し皇今馬到
御親王師斯特とて
藤原之役氏作奇
やとて
高照
藤原の
食國派
都宮
神
天地
盤走
夜子の
素木佐
物
玉藤成
甚手取
家
鴨自物
吾作
やね國り
巨場地

我國人 常世まゐらん
萬む海 ありは毫々
新代と 泉乃河より
持認海 志本北都摩志
百不足 九十九より
所より 久見
神の随ふ 有之
右日本紀曰朱鳥七年癸巳秋八月辛酉藤原
字紀八年甲午春正月辛酉藤原宮冬十二月
庚戌朔辛卯遷居御原宮
持統天皇九年甲午正月乙卯也

藤原御井歌 作者不詳

やいゝと、よき青き乃

高照と日と花と鳥と
藤井と大御門と賜て
垣安と堤の金と
在まゝ 見しをまゝ
日本 青香奥山人
日 大御門より
春の山路 志本山人
畝大の 此み山
日の傍の 大御門
山と 山と
青菅山人
背衣の大御門

背^セ灰^{ハイ}の大^{オホ}御^ミ門^{カド}は
 恒^{コト}若^{ニギハヤヒ}へ神^{カミ}ひらへ
 右^{ミナミ}へきしきしき
 新^{ニギハヤヒ}友^{トモ}の大^{オホ}御^ミ門^{カド}は
 雲^{クモ}居^イる遠^{トホ}くありけり
 高^{タカ}知^チや天^{アメ}の御^ミ門^{カド}は
 天^{アメ}知^チや日^ヒの心^{ココロ}新^{ニギハヤヒ}乃^ノ
 水^{ミヅ}こそはしきしき
 御^ミ井^イの清^{スガ}水^{ミヅ}短^{ミダ}う
 藤^{フジ}原^{ハラ}の大^{オホ}宮^{ミヤ}はくあしきんや
 處^{トコロ}女^メは友^{トモ}はまきりあすも

後^{ノチ}藤^{フジ}原^{ハラ}京^{キョウ}遷^{ウツリ}す寧^{ニギハヤヒ}樂^{ラク}宮^{ミヤ}時^{トキ}舞^{マユ}
 長^{ナガ}くはのなまけり
 柔^{ユウ}備^ビ公^{キミ}之^ノ家^{イヘ}を
 まりくは河^{カハ}の川^{カハ}は
 舟^{フネ}を
 川^{カハ}限^{リミ}の
 八^{ヤチ}十^{ジュウ}所^{ショ}あり
 玉^{タマ}梓^シの通^スり
 青^{アヲ}より
 三^{サン}は川^{カハ}は
 我^ガ移^ユり
 衣^イの上^{ウヘ}より

卷之五

柿本人麿從石見國別妻上來時

石見乃海
能浦廻

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf from an old book. The paper has a slightly textured appearance with some faint smudges and a small, dark, irregular mark near the top center. The left edge of the page is bordered by a dark, possibly black, material, which appears to be the binding or the edge of the book's cover. The overall tone is warm and slightly yellowed, characteristic of old paper.

朝羽振 風くく光
夕羽振 依くく来れ
凡のし共 御くくく
玉座成 依宿之妹と一こいす
病衣の 置くくく
此道花 八十限
万ツメ けりくく
や遠く 里くく
や高き 山越来れ
万草花 けりくく
志くく 妹くく門将見

康此山

父方二首

石見の山高角の山より
羽の山と見ゆん
小竹の山と見ゆん
志くくく

角摩經

石見の海花

言さく 朝の碀
公りく 夕く
義破く 玉座
玉座 康麻之
海花の 夕く
公り来れ けり
公り来れ けり

六

肝 何 い 渡 り 山 さ
 大 舟 の 渡 の 山 さ
 下 の 神 の 屋 の 山 さ
 天 傳 の 入 の 日 の 月 の
 ま の 衣 の 物 の 衣 の 物 の

一三六

青 駒 の 足 の 我 の 我 の 我 の
 姓 の 姓 の 姓 の 姓 の

一三七

秋 の 秋 の 秋 の 秋 の
 我 の 我 の 我 の 我 の

一三八

石 見 の 海 の 津 の 浦 の 浦 の
 浦 の 浦 の 浦 の 浦 の
 浦 の 浦 の 浦 の 浦 の
 浦 の 浦 の 浦 の 浦 の

常^{トナリ}通^{トナリ}しり 満色^{マンシキ}は^ハし^シて
柔^{ユウ}田^{テン}津^{シン}の 荒^{アラ}磯^{イソ}乃^ノう^ウぬ^ヌり
蚊^カ青^{セイ}生^{セイ} 玉^{タマ}藻^モ花^ハの^ノ藻^モ
明^{アカ}来^キ入^ニ 浪^{ナミ}く^ク来^キ来^キ来^キ
夕^{タタ}去^ク入^ニ 風^{カゼ}く^ク来^キ来^キ来^キ
浪^{ナミ}の^ノし^シ 彼^カら^ラか^カく^クり
玉^{タマ}藻^モ奇^キ 康^{キヤウ}武^ブ富^フの^ノ
教^{キョウ}妙^{ミョウ}の^ノ 妹^{イモ}く^クも^モし^シと^ト
露^ロ夜^ヤの^ノ 置^{オキ}て^テも^モし^シ入^ニ
此^{コノ}通^{トナリ}乃^ノ 八^{ハチ}十^{ジュウ}限^{ゲン}毎^{マイ}り
乃^ノの^ノ破^ハ 皆^{みな}み^ミし^シと^ト北^{キタ}
弥^ミ遠^{エン}の^ノ 里^{サト}放^{ハナ}れ^レぬ
登^{トビ}高^{カウ}に 山^{ヤマ}も^モ超^ス来^キ来^キぬ
早^{ハヤ}敷^{シキ}屋^ヤ所^所 吾^ガは^ハし^シれ^レ兒^コっ
又^{マタ}草^{クサ}の^ノ 思^{オモ}ひ^ヒく^クそ
ま^マく^クと^ト 南^{ミナミ}の^ノ作^{サシ}ぬ
乃^ノの^ノ此^{コノ}山^{ヤマ} 又^{マタ}予^ヨ
石^{イシ}見^ミの^ノ海^{ウミ}の^ノツ^ツ山^{ヤマ}の^ノあ^アの^ノり^リ
乃^ノの^ノ池^{イケ}と^トい^イふ^フ乃^ノの^ノ見^ミえ^エん^ン
右^{ミナミ}奇^キ特^{トク}維^イ同^{ドウ}句^クと^ト桐^{トウ}替^カ因^{イン}以^イ重^{ジュウ}載^{サイ}
天^{テン}皇^ス崩^{ムス}時^{トキ}婦^フ人^ニ作^{サス}奇^キ一^{イツ}首^{シュ} 姓氏^{セイシ}未^ミ詳^{ジョウ}
空^{カラ}野^ノ師^シ 祥^{サウ}子^シ多^タく^ク来^キ来^キ来^キ
乃^ノの^ノ建^{ケン}屋^ヤ 朝^{アサ}を^ヲ来^キく^ク君^{キミ}

新あしき巻物にて
被りし腕時と
よりより君より来
るるもの

太后御一首

鈴実取 淡海の海
奥放で 橋より船
色に附て 橋より船
奥津かい 痛さるね
色に附て 痛さるね
若草此婦のりし巻物

従山科御陵退散之時額田王一首

八隅知之 大王
山科の鏡の山
新あしき巻物にて
哭しものさしありて
百城の 太宰の山
天皇崩時太后御一首
八隅知之 我大王
中より 召賜ぬ
明来ハ 同賜なり

神岳の 山はくは
天の 河原はくは
其山に 召賜はくは
夕の 浦まはくは
明の 夜はくは
明日香の 晴御原の宮り
天の 玉の
八陽知く 吾大玉高照是

天王明之儀八年九月九日奉為御命今之
夜夢裏習賜御奇一首七歌集申出

何方の 伊勢の國は
奥津屋の 靡く波り
塩氣の 香る國は
味楽の 夢の
高照の 日
日垂子尊廣宣之時人丸
天地の けしき
久遠の 天の河原
八百萬 千萬祥の
神集 集

神カミ分ワケ時トキ

天照
日
女之命

天ツとい
ありめい

葦原
水程

天地の
うらみ

志乃祥の命

天震
地動

神分

高熙之

飛鳥の
渾身を
子。

神のまゝに
おまかせ

天皇の
志は奇蹟と

天原
石上
とり
ひ

沖あり
ありい
せん

吾^カ
 王^{キミ}
 (ノ)
 皇^{ミコ}
 子^コ
 (ノ)
 令^{ミコトノ}
 (ノ)

天下
Lib
五
一
七
五

春記

望月北
漢一夫人北

天
下
の
人
々

大船の
きい
きい

天
水
為
子
為

子
 子
 子

玉垂れ 越の大野乃
初あゝ 玉裳ひらき
夕音り 衣のあきそ
草花 祐祐もじり
あゝのふ 及身一肩
三寺 玉神のしる玉垂れ
越野とるそそめんや
石武本曰齊河鴻王子越智郡之時伯頼
部王女歌也 日本紀曰朱鳥二年九月
乙巳朔丁未師大參王于川嶋先

明日香王末施彌言時人廣作
飛鳥女此河の上瀬 石橋より

今り瀬より 打橋より
石橋より 生介いりとか
玉垂れ ぬゆきやう
打橋より ありとらわ
川瀬より 加瀬はいり
何より 玉垂れ
まゝれ 玉垂れ
あゝのふ 川瀬れ
夕音り 衣のあき
草花 祐祐もじり
あゝのふ 及身一肩
三寺 玉神のしる玉垂れ
越野とるそそめんや
石武本曰齊河鴻王子越智郡之時伯頼
部王女歌也 日本紀曰朱鳥二年九月
乙巳朔丁未師大參王于川嶋先

らうこと ずいー時り
春部よ 親おかし
秋を じい糸から
散妙の 神あはさる
鏡を 見しあふ
三日月の ぶらり
ずいー 君と時
幸しき わいふひ
湯食ふ 木能文と
常玄と 定めふいて
味澤相 目辞と絶れ
あふれ 夢やと憐れ
宿元ふれ 片恋の婦
お馬 けいふいふ
夏ふれ ずいーとて
夕星の かゆきあゆき
大恥の 多ふあふれ
遣りか 情もあふ
其原の 是れ知るか
春のそと 春のそと
天地を やいふ
ずいふ 湯上り懸せ

一九七

一九八

一九九

廿二

明日香川 万代まで小
けきやい 万代までこれ
形見くあり 程々言

身は走つてしまふせうな
予も水ものかかるあき

あつたあつたにんを
よりききこれにきき

高市皇子尊城上鑑定時

柳本初人丸

かきくもゆいふいふ
あつたあつたにんを

久堅れ 天江御門と

卯くも 定にきけて

神くも 磐隠もす

八陽志 正ききこれ

赤れう そとれ國乃

ききき 不破山越

初錦 日しきく原せ

初玄子 安母理も

天の下 治んのも

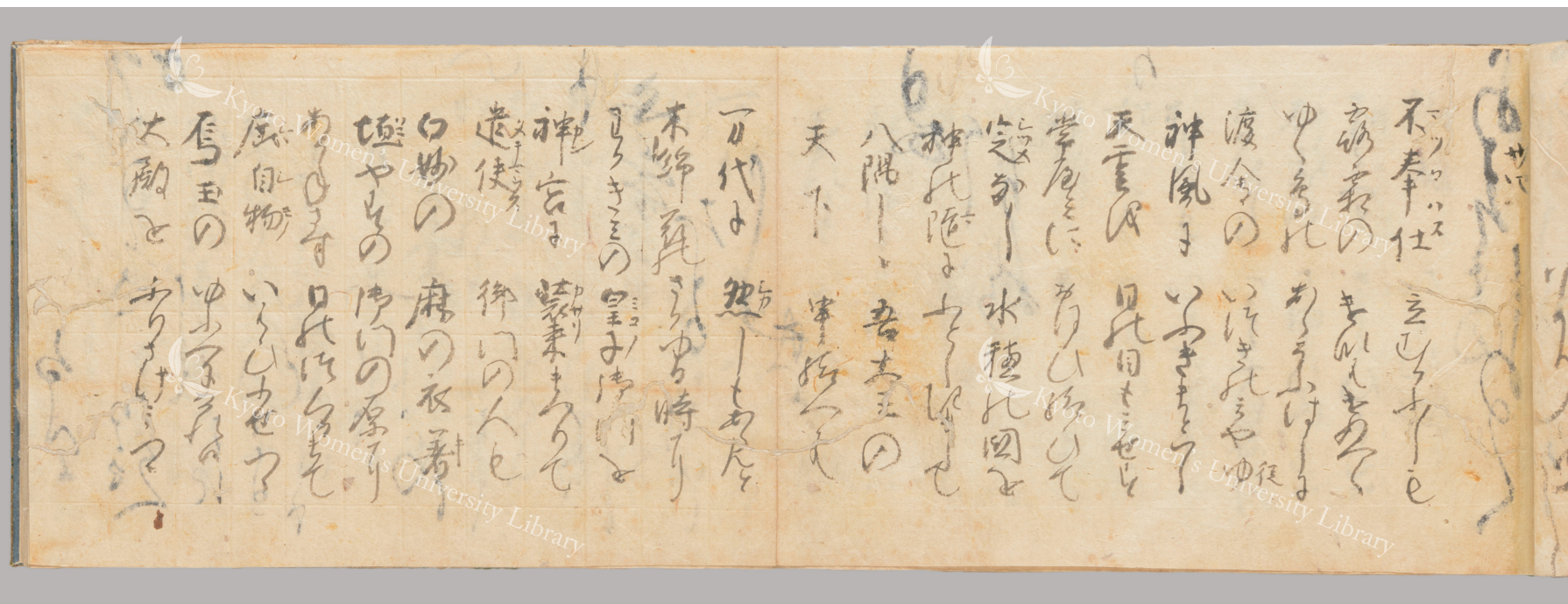
食園と 定あき

とらうあ あつた國の

の
さ
し

御軍とやいふ
人々和彦と
不奉は
皇太子
大御身
太刀さし
大い
御軍士と
齊
雷
吹響
歌
諸人の
け
冬
雪
風の
取
三
三
引放
大雪

人々和彦と
國と
随任
太刀さし
大い
御軍士と
鼓
美
小角
虎
旗
春
都
夕
ふ
冬
伊
甲
箭
能



廿五

新成
いとし

待
さういふ

春馬の
いふ

あつと
いふ

おと
いふ

部
いふ

神
いふ

朝
いふ

常
いふ

神
いふ

あつと
いふ

万代と
いふ

作
いふ

了代
いふ

天の
いふ

玉
いふ

あつと
いふ

あつと
いふ

口
いふ

あつと
いふ

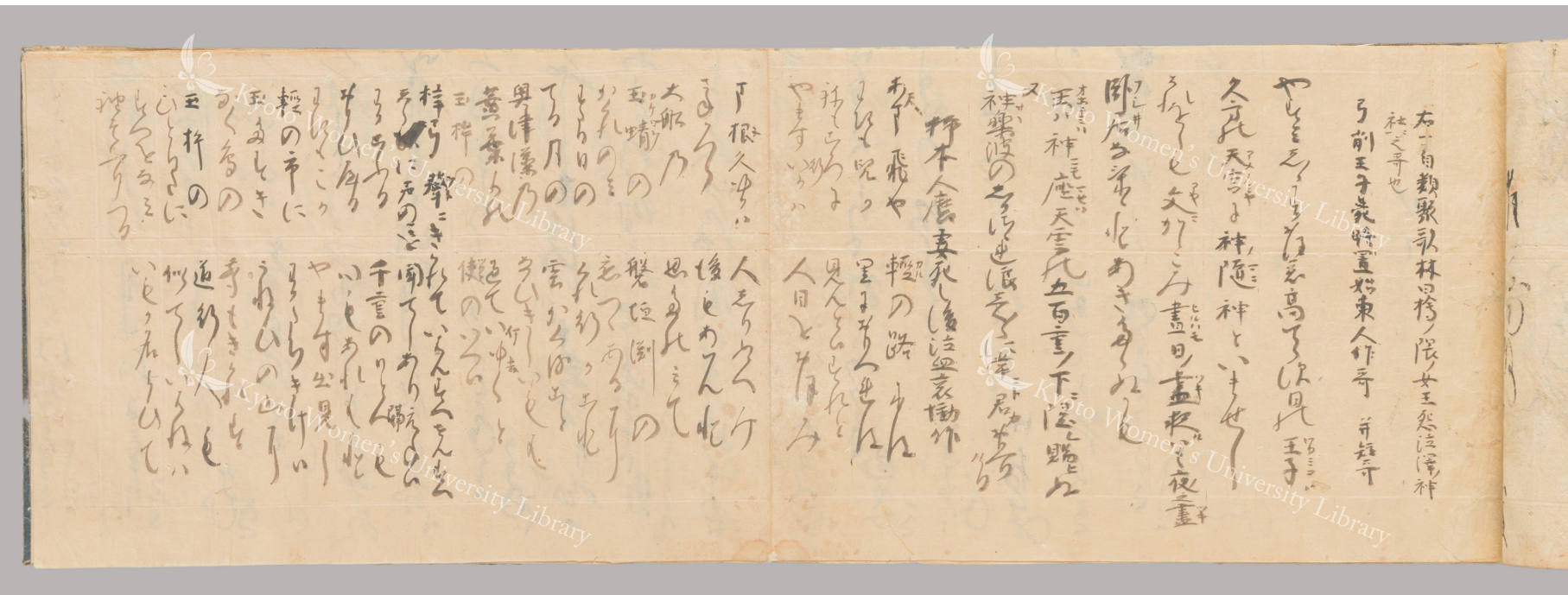
哭
いふ

あつと
いふ

1100

1101

1101



懔內蒸聖子

氣
指
才

宇都宮^{ツツミヤ}等
 携^{タシナフ}打^ヒ
 出^デま^ー
 指^{サシ}さ^るあ^らわ^る
 姓^{セイ}あ^らわ^るあ^らわ^る
 姓^{セイ}あ^らわ^るあ^らわ^る
 う^うき^きう^うき^き
 り^りあ^あら^らわ^わる^る
 天^{テン}領^{リョウ}中^{チュウ}隠^{イン}
 胡^コ比^ヒ乃^ノて
 お^おし^しあ^あら^らわ^わる^る

まゝなりしを

歌うゑ 朝日まきて

夕まゝ 消さし

音くく 夕まゝして

明く 失くく 梓弓

音羽成て 勢舞个事なき

布拵の 少我くして

劔刀 身子そく寐え

居るの 其端のさし

さし ちひて 新

名く ちひて 新

時うゑ 過ゆさう

朝ちんや 夕ちんや

短歌二首
果はのさのさくや 道の川橋あそびなりけり
天鼓んはのさくや 道の川橋あそびなりけり

讃岐国猿大嶋親石中死人丸作

玉藻くきく 局まの国がく 見せ

神栖く ちんや 天地の日月とて

満ちん 神の御面 満ちん 神の御面

舟りて 船に 舟りて 船に

奥の 奥の 奥の 奥の

煮飯面 煮飯面 煮飯面 煮飯面

浪の 浪の 浪の 浪の

家々の 家々の 家々の 家々の

玉指の 玉指の 玉指の 玉指の

二二八
二二九
二二〇

急ぐ中 愛妻等

及奇

妻もい様い様と云ふに三山野郎と云ふも
やうい様い様と云ふに三山野郎と云ふも
やうい様い様と云ふに三山野郎と云ふも
やうい様い様と云ふに三山野郎と云ふも

土寅親王光晴作

梓の手によりてはまきまきと云ふ
得物やと扶立句。高田山は春野焼
野火と云ふをいふ火と云ふは
まきまきの通来人の云ふ源雲
もまきまきの衣は着てまきまき
まきまきの衣は着てまきまき
まきまきの衣は着てまきまき
まきまきの衣は着てまきまき

短奇三首

高田山は秋芽子と云ふ
まきまきの通来人の云ふ源雲
もまきまきの衣は着てまきまき
まきまきの衣は着てまきまき
まきまきの衣は着てまきまき
まきまきの衣は着てまきまき

右歌集那金村奇集出

或奇

才二

一二二

一二二

一三〇

一二三

一二三

一二三

一二四

第三

長皇子遊獵路池之時人作并短哥

八陽知之。吾大王。高克。吾曰。金子。

馬

三
子
立

三

7
8
9
10
11
12

卷六

拜
の

鷄
二

ふい

志
志
物

卷之四

新
あし

...

72

德

久

天
三
内
子
一

壽

東之元

春

卷之三

73
b
17

及子

久堅此

月夜鋼

丁巳

の
著
子
子

入
乃大軍
日事

もせ、真本

蘇山

海子

鴨君

香具山歌

天降付

天の
か
山

高上

春

松

池源記

人丸猷新部言子歌 并参

八隅志 月夜の月の

高てく 日のくこの

志来り 大敵のく

久方の 天のく

雲志の 月のく

とく 世のく

矢釣山 志来り

雲 驕り 海井く

赤人 望不 盡山歌 并短奇

天地乃 月 特子

神 志 高きく

駿河 志 来り

天原 志 来り

月 志 来り

了 月 志 来り

白雲 志 来り

時 志 来り

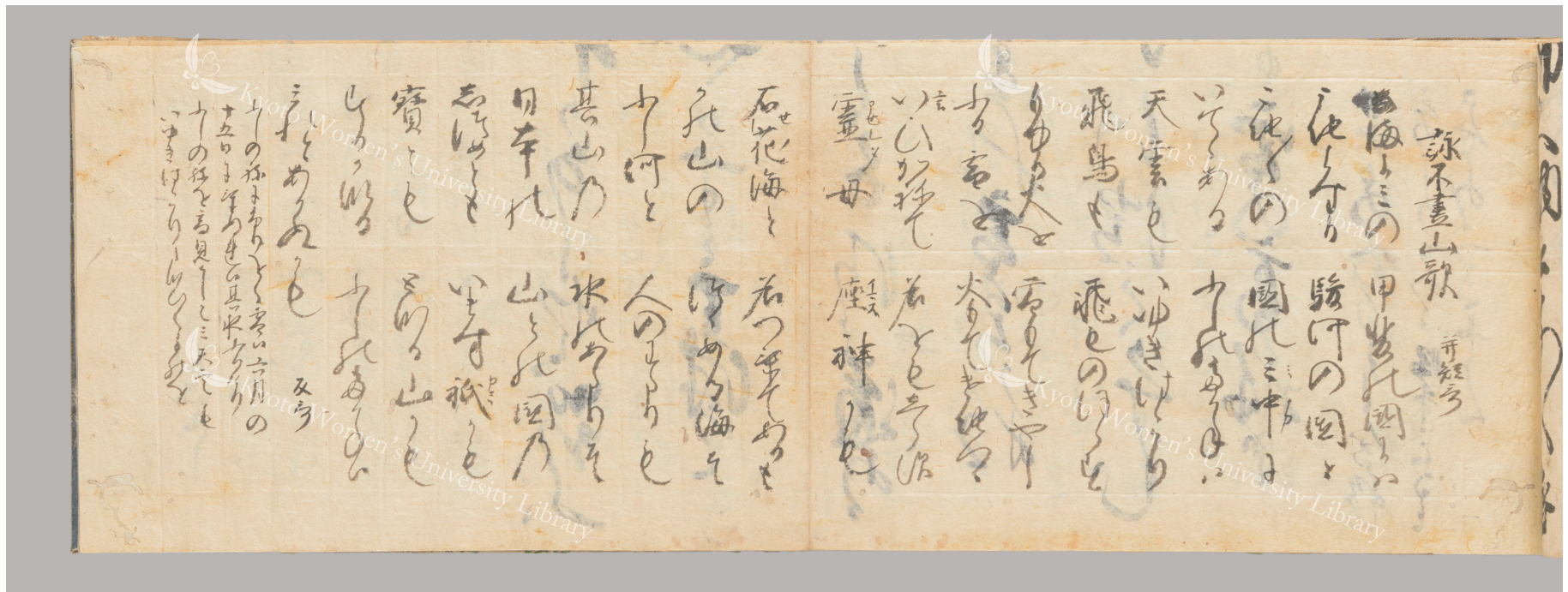
語り 志 来り

月の 志 来り

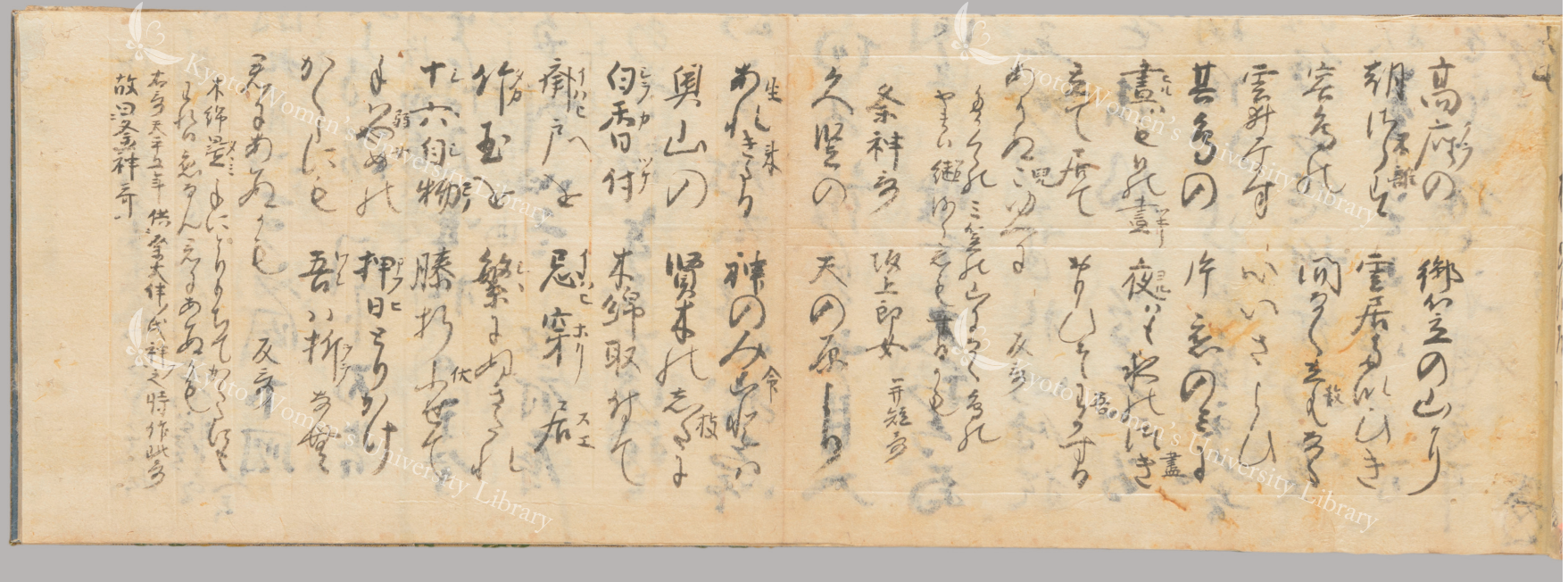
田 志 来り

中 志 来り

34 ウ



右一首高橋建玄磨多
赤人至伊豫温泉作 短多
皇神祖の 神乃以言也
志はく國 之盡湯も霜
ふはれも 嶋山 也
射狭庭の 思よりゆて
歌思 神思とせ
三浦氏の 樹村とせ
臣のよも 生れはる
明馬を ありわたり
と以て 神さひゆん
新筆家 久多
百一氏の大吉人の飽田津子
母のりしと年れうう
金神岳赤人作 并短多
ミ諸山 神さひゆん
五石技師 七海 也
とれ樹の 也 継詞より
玉乃 あり事あり
ありて やまのり
寄これ 舊京所ハ
山あり 河とほろ



登瓊波岳

丹波真人國入

鸚鵡

高山

明
氏

卷之四

神機

國見

卷末成

見已午

雷

光積

少子

羈旅

海
卷
三

あしき

白
卷
四
五

座待月

明

臨
さ
わ
れ

陸路亭

江

けふあひるもに見えりやうきもの
書きたるをみづるも。

四
新
稿

...

Library

三

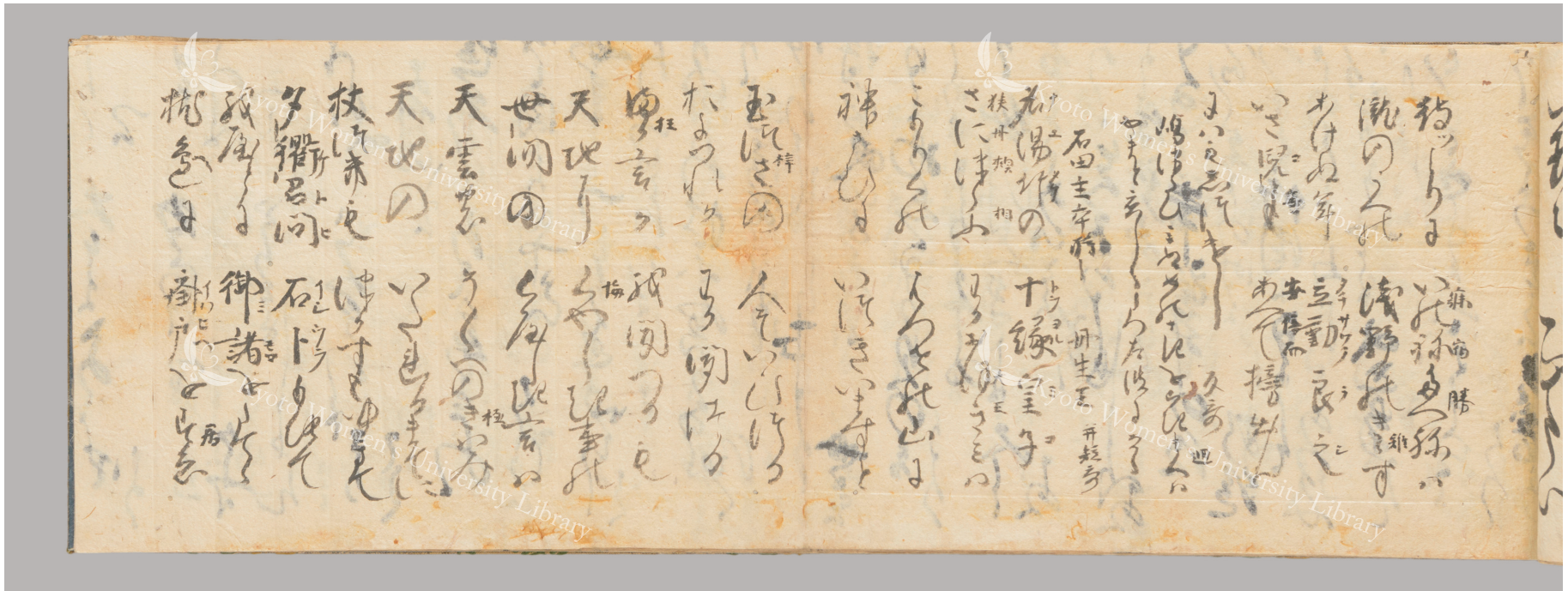
Women's

さ
わ
れ

卷之五

2

(Faint bleed-through from the reverse side of the page)



ようにや見えん

四二四
四二五

右一首或人元作
或年及うき自
ありとれどもと題女うめにゆり
むいふをありとていけや
河原のまきとていけや
ふりあふくは似か人もたれ
過勝屋真同娘子墓 赤人
未俗語云すと思
賀能麻未能思胡

四三一

ふりさる ありきん人の
係又情の 常と替て
虎屋主 妻いふ常
かたうの まれてこゝろ
奥柳と やとまきけに

四三二

ふりさるや ありきん人の
松の根や 遠くろき
言のまも 虎のまもいふ
ふりさるや ありきん人の

四三三

ふりさるや ありきん人の
まのてふと 興つきとて
ふりさるや ありきん人の
権津國班田史生丈龍磨自経之
時判官大伴宿祢三平作歌 并短哥

四四三

天雲の 向伏國乃
ふりさるや ありきん人の
室祖の 神のまもり

43
才

玉
之
乃
乃
乃
乃
乃

母又子
妻子等子

本
上
下

天也乃
中
我
己
禱

いふに 年々 月々

牛留鳥 きゅうりゅう

卷之六

不千

Kyō
Kyō

名前の置てゆき也

時をわけて
及ぶ

けりしふりありしふりあり
 修政ありきとふゆき
 何事と物なりとむす
 まに告ぐとありき

大伴功上即女悲嘆
尺理願死去

揚南の新派

人事と
去と来と

同放氣
親族兄弟

當國後
王年

山々々々の
志はす

らるる
まゝ
し
々
へ

里家ハ
ニ
ア
シ
ク
ニ
シ

江
方
小
金
宋
如
一
也

子もきき
 けの心きき

きくし威
志のい半^チ内^イ

志の
家と
心

新玉乃
年代と長く

七
物

人死を
死と
死と

嘉子姫
和子姫

人の心

草拔

三十一

うにかりに胸ううめ
いも子 老けもき
世の中あはれ

特てはけりやんといひ
いゆきまぬきりもき
いゆきまぬきりもき
いゆきまぬきりもき
いゆきまぬきりもき

春二月廿積雪皇太子家持侍
けきくも 後 ありき
御子のみその
可代は

大日本 春ふれや
いしき 春ふれや
いしき 春ふれや
いしき 春ふれや
いしき 春ふれや

河津の 年魚小い
いしき 年魚小い
いしき 年魚小い
いしき 年魚小い
いしき 年魚小い

久々の 天すせ
いしき 天すせ
いしき 天すせ
いしき 天すせ
いしき 天すせ

せんき 天すせ
いしき 天すせ
いしき 天すせ
いしき 天すせ
いしき 天すせ

春三月二日二日

四六七

四六八

四六九

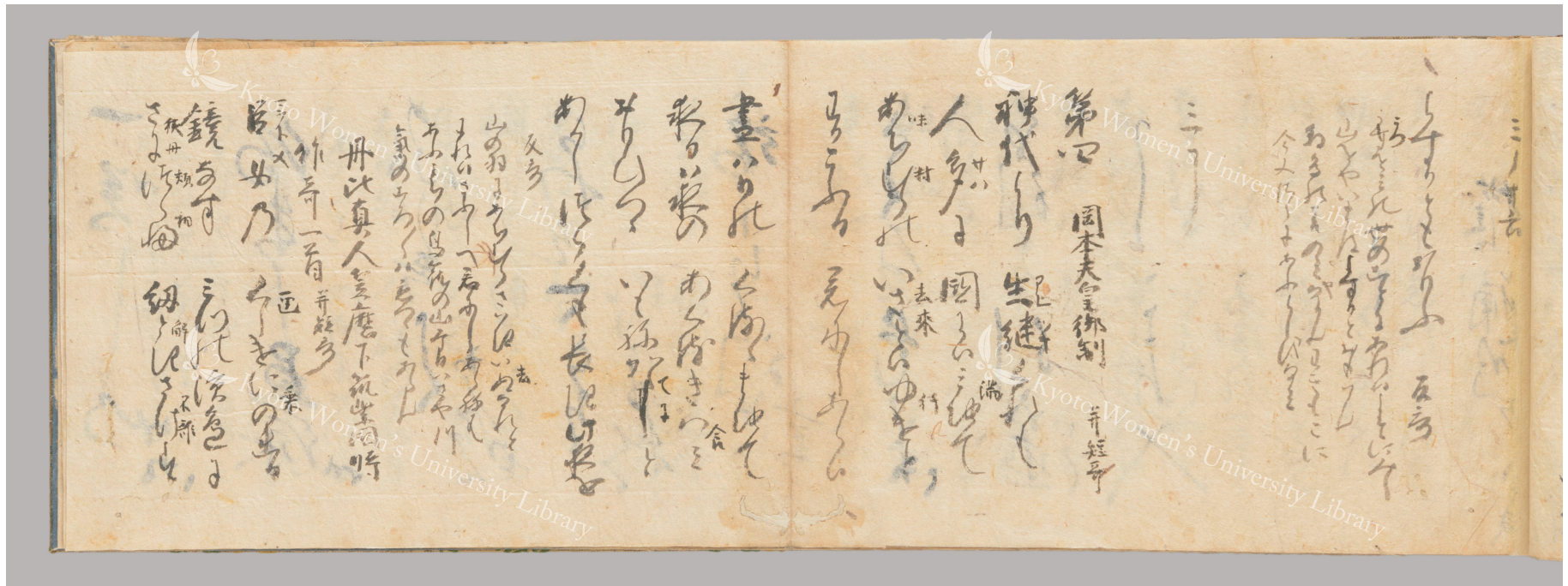
四七五

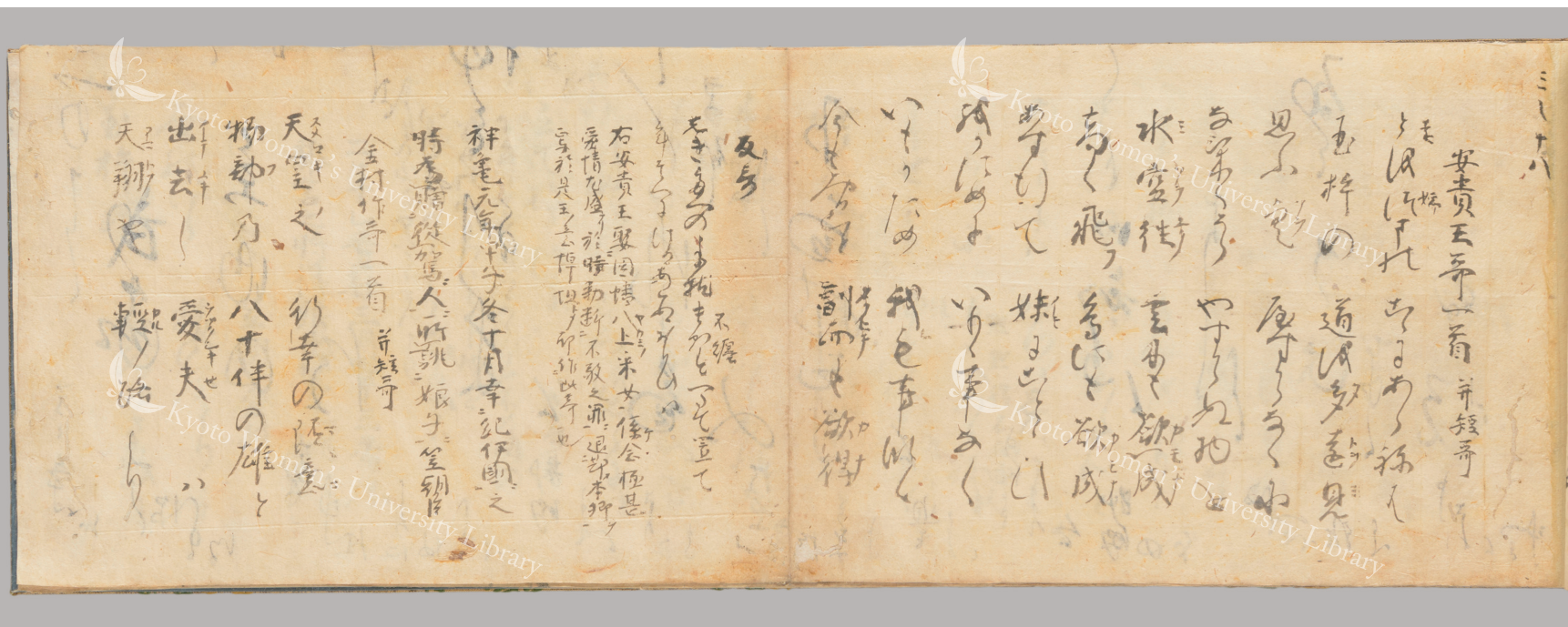
四七六

四七七

かしこも ありけり
 日よ玉の 今に
 わたしの 八千代の雲と
 りあふめ いづみづ
 胡蝶も 鹿猪も
 新鶴も 大御馬
 柳馬 心に見え
 海邊山 木立の繁
 世も 心
 大夫人の 心
 心よりいへ

様 ち 靱より
 天地 不遠
 万代 分
 常 服
 白 常
 悲 心





しんしん

玉にとき

向ふと見ゆ

廟よりい

木道に入立

真土山

こゆんるの

苦葉の

ちり飛見ゆ

そとく

まねねとす

草花

もくしん

かりひ

元いあんと

あそふ

あつたふ

あそふ

あつたふ

あそふ

あつたふ

あそふ

あつたふ

あそふ

あつたふ

あそふ

あつたふ

あそふ

あつたふ

あそふ

あつたふ

五四四
五四五

五四六

二年し春三月幸三香原
離宮之時得娘す
並短歌一首

笠朝金村

あそふ

あつたふ

あそふ

あつたふ

